初夏の北海道

苔石

北海道の六月は一年中で最も天氣のよい季節だと聞く、名物のガスも此の月が一番少ないのださうだ。昭和十六年六月十九日連絡船で函館に上陸したのが午後零時五十分、昨夜上野を發つ時小雨だつたのが此處へ着いてみると空には一片の雲も止めぬ程の晴天ではあるが、北東の風流石に寒く、家を出る時薄手ではあるが毛のシャツを着て來てよかつたとつくづく思ふ。A君が迎へに來てゐて下さつたので、北海道は始めての私も何かなしにほつと輕い氣持になつた。

札幌の汽車がホームで待つてゐたので早速乘り込む。鈴蘭賣りの乙女が客を呼んでゐる。水兵服を着た其の姿が賣子といふ感じを與へない。A君が買ひませうかといふ。これから十日間の旅に枯らすのが惜しいので見合せた。汽車が動き出すとA君はポツリポツリ北海道の豫備知識を與へて下さる。北海道は九州、四國、臺灣を合したよりもすつと面積が廣いことや、東北六縣に新潟縣を加へたのと略同じ廣さだといふことや、明治二年開拓使時代は僅か五萬八千位の人口だつたのが、昭和十年の國勢調査では三百六萬を突破したことや、其の密度が一方里當り五百三十人で全國最低の岩手縣の約半分位に當つてゐるといふことや、增産計畫を樹てて人口六百萬を目途とし色々の施設を道廳でやつてゐることや聞くもの總てが私の心をとらへるのである。

やがて右窓の空に燒け山ではあるが、スロープのなだら

かな見るからに美しい山がくつきりと浮び上つてゐる。駒ケ岳だとA君からきかされたが、内地の駒ケ岳以外に私の頭には地理の記憶がない。汽車は大沼を渡る。處女林の豐かな緑に包まれた夏の大沼は實に美しい。駒ケ岳は冬スキーによく、大沼はスケートによいとA君の説明はピントを合せながら續けられる。

内浦灣に沿ふた一帶は原野が多い。北海道の入口でありながら何故か開墾がおくれてゐる。放牧の牛がチラホラ見え始めたので北海道を旅してる感じがする。それは東京で常に喰べてゐるバターやチーズからくる聯想的な感じかも知れぬ。内浦灣を離れる頃から次第に山路にかゝる。驛と驛との距離は八粁乃至十粁位はあらうか、汽車からの眺めも迫りくる山の林にさへぎられて、目を驚かす程のものなく疲れた旅人にとつては單調さが續く。自然A君との會話は東京より北海道へ、そして北海道より東京へと繰り返へされやがて今次事變の上に及ぶ。A君は昨年暮歸還されたばかりなさうだ。軍機漏洩のことなく實戰談をしみじみと語られる。外套を二度も射貫かれながらよくも助かつたものだといふ。またの召集を待つてゐるのださうな。聞く身にとつては御苦勞なことだと心の中で感謝せずには居れない。聖戰四年未だに爆彈一ツ見舞はれぬ銃後の吾々は幸福だ。日本の國に生れたことがどんなにありがたいことか。

南尻別を過ぐる頃、あれが蝦夷富士だとA君は右窓を指す。地圖を見れば羊蹄山と書いてある。吉田口から見た所謂裏富士そつくりの山が天空に聳えてゐる。頂上三分の一位が燒け肌でそれより麓へかけて緑の林に包まれてゐる。蝦夷松の林でもあらう緑は黒ずんで見える。出雲不二、岩手不二、津經不二等々各地方に富士と呼ぶ山々はあるが此の位富士山に似た山はおそらくなからう。富士山と同じ過程で出來た火山なさうだが今は活動してゐない。目を左窓に轉ずれば殘雪を載いた連峯が見える。ニセコアンヌプリといふさうだ。ヌプリとはアイヌ語で山のことだとA君は説明する。此の山はスキー場として最も雄大さを備へてゐるばかりでなく、山腹には數ケ所の溫泉場があつて湯治

にもよいさうだ。汽車が進むにつれ羊蹄山が右に左に見えかくれする。それ程鐵道が迂餘曲折してゐるのであつて山を廻つて汽車が進むのではない。倶知安近くなれば汽車は羊蹄山の麓を通る。何處から見ても同じ姿の山だ。

倶知安を過ぎて間もなく降り坂にかゝる。植え殘りの田に苗を植えてゐる人達が點々と見える出征兵士の家族部隊でもあらう。あの人達の爲に秋は稔れと念じつゝ進む。やがて平地に降れば苹果畑が廣々と續く。餘市苹果の本場なのだ。美事な苹果畑である。

餘市を過ぎれば忍路港が左に見える。明治の始め頃迄は鰊漁の本場で可なり殷賑を極めたものださうだが、今では遠海漁業に變つたのですつかり寂びれてしまつてゐる。百戸位もあらうか。

忍路高島およびもないが
せめて歌棄磯谷まで

と神威岬を畏れて遺瀨ない情緒を哀調にうたへた松前女の夫達が漁に出掛けたのは此の處なのだ。

今でも產卵期になると鰊群來で海の色が變るばかりでなく、海荒れの日には數十貫も磯に打揚げられることがあるといふことである。陽は韃靼の海に浸り美しい空の色も、波のきらめきも一瞬の間にして、たそがれそむる海の左手に積丹岬がどつしりと突き出て見える。あの岬の向側あたりが神威岬であらう。鹽谷あたりで始めて北海道特有のポプラの並木が見られる。暮れかゝる草原には家路を忘れたかのやうにホルスタインの黑白班が一心に草を喰むでゐる。

夕闇迫るうちに小樽を過ぎた。石炭と木材の山と積んであるのが目についた。小樽高商の在る處だが、これ以上港としての發展性はないらしいとのことである。東西に山合を走る細長い街のやうに思はれた。かれこれ八時近く全く夜となつて札幌驛に着いた。驛から程遠からぬS旅館に投宿する。昨夜上野を發つてから丸一晝夜汽車から船、船から汽車と乘りついで來た爲體は綿の樣に疲れ切つてゐる。風呂からあがつて呑むだ一本のサツポロビールの味は格

別である。お變りは駄目だとのこと、時局は此處にも反映してゐる。御飯はうづら豆の焚き込みだ。東京に豆のないのも無理からぬと思つた。此處では豆を常食にしてゐるのだ。夜は更けるに從つて寒さが增してくる。鐵瓶の沸る音を聞きつゝ床に入る。

六月二十二日、札幌滯在三日になるが仕事の都合で何處も見物をしてゐない。午後から北大植物園を見にゆく。中でも高山植物のみを集めた花園は特に珍らしい。幾百種類のその中で自分の知つてゐるものは數へる程しかない。

園內博物館裏楡の木立も珍らしい。開園當時原始林の中から取り殘したものだといふことである。木立の中から郭公の聲が聞えて來て大氣かヒンヤリと感じられる。

次いで北大學園に行く。あの繪端書等でよく見る素晴しいポプラの並木が特に目につく。正に天を衝く體の見上ぐるばかりの大木である。內地のそれの樣に弱々しさは少しも見出せない。學園はかなりに廣く、中に前身農學校時代の底く古風な白亞の校舍が今尙殘つてゐる。學園から見る手稻の山には雲がかかつてゐて明日は雨かと思はせる。見たいと思つてた工場等の視察は時節柄遠慮を要するので宿へ歸る。

六月二十三日、愈々今夜の十時半で釧路へ發つので午前中宿で仕事の整理をし、午後から眞駒內種畜場に自動車をとばした。時間のゆるす限り見學しやうといふ下心なのだ。種畜場は道廳の經營に係り札幌の南約六粁の地點にある。宿を出る時雨が降り始めてゐたが此處へ着く頃は止むでしまつた。總面積三十四萬アール、坪數にしてどの位になるか實に廣大なものである。綠草地帶と耕作地帶の中間に事務所を中心として既舍や牛舍、雞舍、豚小屋、兎舍等相當の廣さに亙つて建ち並んでゐる。これ丈の土地と設備があるなら自分もやつて見たいと思ふのは私だけでもあるまい。

此處が北海道畜產の原泉となつてゐるさうである。三時頃までには大體見學を終へたが、角の無い牛が妙に頭の中にこびりついて離れない。聞けば仔牛の時に藥品で燒くの

ださうだ。それがこの種畜場獨特のやりかたであり、乳牛飼育上結果がよいやうだと係員の説明である。

餘剩時間を飽く迄利用して更に定山溪へ向ふ。豐平川に沿ふて車をとばす。道路は砂利道ではあるが路面の維持がかなりよい。車が谷に入るに從つて兩側の山の緣りが次第に美しくなる。千古斧鉞を加へぬ鬱蒼たる密林である。御料林なればこそ今も尙此の林相が保てるのである。

林相の美を愛でつゝ定山溪に着く。川の位置といへ、湯宿の配置といへ何處か鬼怒川溫泉に似たところがある。T旅館に揚がつて時間一杯休憩することにする。湯槽の廣さは五六十人も一度に入れる位の大きなものだ。湯も澄んでゐる。男女混浴で丁度私の入つた時は土地の女達が十人程入つてゐた。習慣故平氣でゐるらしいが始めての者にとつては一寸テレさせる。あてがはれた二階の部屋で暮れゆく對岸の山を眺めつゝ靜かに夕食をとる。山の自然美は執着を感ぜしむるものがある。今が盛りなのであらう蕨がとてもうまかつた。

電車で歸ることにして釧路行札幌發の汽車に間に合ふ樣に宿を出た。電車にはハイキングの歸りらしいリュツクを負ふた一群の青年男女と私共丈で割合客が少ない。釧路行の汽車が發車間際に札幌驛に着いた。A君がこれから先も案内して下さるといふ。同行のO君と三人寢臺にもぐり込む。夜明が早いと聞いて早速横になつて寢ることにする。

六月二十四日朝三時五十分目が覺めた。寢臺車のブラインドを揚げて見ると白々と夏の夜は明け離れるところだ。未だ誰も起きてはゐない、狩勝峠にかゝるのは四時二十分頃と聞いてゐたのでO君を起こしに行けば、O君は今し目覺めたところだつた。汽車は徐々と峠にかかつてゐる。蝦夷松の濃綠の林がだん〳〵多くなる。白樺の肌が特に目につく。

落合を過ぎて隧道暫し、眼界一時にパツと明るくなる。峠の一際高い峯がその半面に旭をうけて輝やいてゐる。北海道の夏の夜明けは肌寒く感じる。やがてその峯を廻ると

遠く太平洋に漂ふ朝雲と綠の線を劃して十勝平野が低く一望のうちに展開する。實にも明るい眺である。汽車は右へ右へと緩やかにカーブを畫きながら平野の眞只中目ざして降つてゆくのである。回顧すれば狩勝峠は遙か後方右手の空に高く聳えつゝ遠ざかる。その峯の肌合には朝陽にまぶしく殘雪の光りが見える。またいつの日か此處を通ることがあらうぞ、思へば絶好の機會ではあつた。

新内から新得あたりへかけて移民部落らしいのが點々と見受けられる。草原が多く耕地の少ないのを見れば主として牧畜をやつてゐるらしい。夏の草原は美しい。特に朝の草原は美しい。帶廣近くなると流石に大農經營をやつてゐるのだらう立派な耕地が見られる。内地の農地を見ては想像もつかぬ程度のものである。帶廣で朝餉の辨當を仕入れる。十勝平野を南下した汽車は音別あたりから全く海岸線に沿ふて東へ走る。此の邊りから釧路平野といふのである。これはまた殆ど木立のない、見渡す限りの草原で牛の群もゐる、馬の群もゐる。草原に續いて太平洋の碧海原が展けてゐる。此の遮るものなき平面的な眺望を持續しつゝ汽車は釧路へ釧路へと進みゆく。

釧路路の夏の草原展けたる
釧路路は青草原ぞはてしなき
釧路路の夏草原を牛はめる
釧路路の夏草原は海に消ぬ

斯くして釧路に着いたのが九時半だ。此處で昨朝根室へ先行したS氏を待ち合はせ阿寒までのして泊る豫定なのだ。

釧路港は鮪漁で音に聞えたところなのだが今では石炭船と木材船の出入がはげしい。非常時風景の現れである。洗炭の爲釧路水道の水原地釧路川の水が汚くなつて困つてゐるさうだ。釧路の道路は非常に悪い。重量物の運搬に起因してゐるのだ。釧路川を渡り高臺の知人岬に昇れば釧路の街は目の下に一望出來る。平野を隔てて阿寒の連峯もよく見える。岬の突端には薄命の詩人啄木の歌碑が建つてゐる。

しらじらと氷かがやき千鳥なく

釧路の海の冬の月かな

と碑面に彫つてある。啄木は此の地で前後二回の新聞記者生活をしたのださうだ。啄木は北海道の風光がよほど好きだつたかに思はれる。

午前十一時半S氏も根室から到着した。昨日根室へ着いた時はガスが降りてゐたが、今朝は眺望が利いて千島の一部が見れたといつて喜んでゐた。俳人のこと故おそらくは佳作を得て來たのだらう。輕い午餉をすましA君の心盡しで木炭自動車の用意も出來たし、明るいうちに阿寒に着くやうにと急いで出發だ。阿寒まで十五里三時間あれば大丈夫だと運轉手は頗る朗かだ。道路もいゝし吾々の心も輕い。冗談と笑を乘せて車はぐん〳〵走る。道路は草原を縱斷してゐる。到るところに牛や馬が草をはむでゐる。自動車でかれこれ二時間漸く山林地帶となる。道路の沿線には立派な開墾地がある。此の邊の移民は土佐人が多いさうだ。粘り强くて大抵は成功してゐるといふ。畑の中に大木の根が殘されてゐるのを見ると移住後年尙淺いのだらう。それにしても十數年前迄は鬱蒼たる密林だつたであらうが。人間の努力でかうもなるものか。生きむとする人の力は偉大なものである。

でもこれから弟子屈へかけては最近離農者が多いので道廳でも困つてゐるさうだ。一は滿洲へ渡るのださうだが之は國策上止むを得ないとして、農業に失敗し失望して北海道を去る者もあるといふ。此の邊は農業丈では生活の安定を得られぬので、主畜農業を奬勵してから最近では成績がよいやうだとA君が語る。乳牛二頭あれば月百圓位の現金が手に入るさうだ。それには道廳の保護政策があづかつて力あるからださうだ。

自動車行程三時間餘にして道路は全く密林地帶にさしかゝり大氣は流石に冷えて來る。路傍には鈴蘭の花も目につく。函館の鈴蘭賣りの乙女が思ひ出される。木炭自動車も途中無事に泊るには早い時刻に雄阿寒ホテルに着いた。荷物を玄關に放り出し直ちに阿寒湖へ向ふ。明日の天候を考慮に入れての行程繰上げだ。我々の外には遊覽客の姿を殆

ど見ない。左手に雌阿寒、右手に雄阿寒二つの山が夕陽を浴びて聳えてゐる。阿寒湖は森に包まれて靜かに眠つてゐる。舟を泛べるには時間がおそい。阿寒湖の「マリモ」と姫鱒は餘りにも有名だから詳しく書くまでもない。がしかしメノコの傳說を書き添へて置くことは無駄でなからう。

昔湖の西岸にモノベツト部落があつたといはれてゐる。酋長シパチの一人娘はセトナといひ村一番の美人だつた。セトナは幼な友達のマニベとは大の仲よしだつたが、成人して副酋長の悴メカニと婚約が出來た。セトナはメカニを甚く嫌つた。それは下僕の悴ではあるが勇敢なマニベに心引かれてゐたからである。之を知つたメカニは或日マニベを殺さうとして反つてマニベに殺されて了つた。怖しい殺人の罪を犯したマニベは、やがて受くべき刑罰をおそれて遙か湖上に遁れ、この世の名殘りに日頃たしなめる蘆笛を心ゆくまで吹いて遂に湖中に身を投じた。それから幾日か經つてマニベの死を悲しむだセトナは、獨木舟に乘つて沖へ出たまゝ再び歸らなかつた。それからといふもの阿寒颪が吹荒ぶ夜はセトナの咽び泣く聲に交つて、マニベの蘆笛の音が幽かに聞えて來るといふ。物語を聞きつゝ湖岸にたてば一層愴みを增す。

少憩の後宿へ戻る。途中密林の奥から漏るゝ郭公の聲が聞かれる。女夫阿寒の二山は次第に空にうすれてゆく。

女の山も男山も暮るゝ閑古鳥

郭公は鳴きつゝ吾は宿につく

宿は原始林に包まれた靜かな一軒家である。湯量も豐富だし、女中も番頭も純朴で感じがよい。六月から十月一杯營業し、冬は留守番を殘して里へ降るのださうだ。

山の綠が二階の窓に迫つてゐて、軒下には清冽な谷川が流れてゐる。湯槽は川に面してゐて水の音が耳近く聞えて來る。郭公はなほも斷續的に鳴いてゐる。湯につかり山を眺めてゐると刻一刻と夕闇が迫つて來る。實に靜かな山の夕暮である。

夏山は暮れつゝ谷は水の音

幾日旅山の湯に聞く閑古鳥

郭公や故郷遠く吾は來つ
郭公やよりそふ窓は暮れむとす

明日は早立ちだ。夕食をすまして間もなく寢ることにする。

靜けさや寢ねてなほ聞く水の音

北海道の夏の夜は明けやすい。二十五日午前四時前なのに早やカアテンが白んで來た。宿の者も客も未だ起きてゐない。さりとて再び寢るには餘りに惜しい。しづかに湯槽に降りて新湯につかる。

今日の行程を頭の中にゑがいて見る。

今日も一日樂しさうだ。首だけ出してじつと目をつぶつてゐると昨日の鳥だらうか郭公が鳴き始めた。靜かな朝の一時だ。やがてS氏もO君もA君も次ぎ〳〵と降りて來た。昨日の運轉手が今日も行つてくれるとA君がいふ。ありがたいと思つた。今日は今度の旅行中で一番の難行程だからである。あの運轉手なら無事にやつてくれるであらうと絶對信頼が持てるのだ。

朝食もそこ〳〵に豆飯のお握に梅干二個宛、それに一行の飲料としてビール瓶に詰めた清水二本を用意して自動車に乘る。午飯は何處になるだらう。宿を出ると自動車は昨日阿寒湖へ行つた道から反對に右へ折れた。椴松、蝦夷松、白樺、楡等の原始林を縫ふて道路は徐々に昇り勾配となる。樹林の古木には湯花の樣なヒゲがかかつてゐる。吉田から富士への自動車專用道路の沿線によく見られるあれだ。學名何といふのか私は知らない。此の道路は阿寒國立公園地帶を東西に貫く横斷道路で所謂觀光道路である。峠の頂上双湖臺に少憩。此の處はパンケトー、ペンケトーの二湖が見えるので此の名を冠したのであらう。トーとはアイヌ語で湖のことだ。蝦夷松、椴松の密林の底に靜かに眠る二つの湖は色あくまで紺碧を湛へ、畏れ見る一帶の景色は絶景といふよりも嚴くしい感じがする。稍左の方を眺めると雄阿寒岳の雄姿が樹林の木の間に見える。小休止の後降り道を注意しつゝ自動車を進める。峠を降れば道路は平坦、弟子屈までは恰ど一直線である。沿線には移住後日尚淺き人達

がせつせと開墾に努力してゐる。北海道は未だ未だ廣い。多少の準備をしてかゝれば大抵成功しさうに思はれる。此の邊は十町歩三百圓位で賣買されてゐるさうだ。

移住民には條件附で十町歩宛無償交付してゐるとのこと。弟子屈から一路摩周湖に向ふ。麓にかゝる頃大粒の雨がやつて來たが湖岸に達すると同時に雨も止むだ。湖岸といつても數十丈の絶壁になつてゐる。山は一面の笹山だが湖に面した斜面は密林となつてゐて湖面は黑澄んでゐる。見るからに凄味を帶びた湖だ。右側の絶壁に續いて摩周岳、對岸の遙か彼方に斜里岳がある。阿寒湖といへ、此の湖といへいづれもアイヌメノコの傳說がある。湖面を見つめながらその傳說を聞いてゐると一層凄愴の感を深うする。流入する川もなく流出する川もなく、しかも一年を通じて水位が變らぬといふ此の湖は高山の中腹に千古の夢を包んでゐるのだ。折柄雷雨沛然とおし寄せて來たが湖をさけて斜里岳の方へ流れていつた、湖面はと見ると何のどよめきも見せず小波一つ立てない。靜寂そのものゝ姿だ。

雷雨きて廣き笹山に笹の波
雷鳴は低く驟雨は嶺を洗ふ

背を湖に向けると、今し雲の絶え間に阿寒連峯が輝やかしい姿を現しつゝあるところだ。連峯の手前遙かの下界には弟子屈を中心とした平野が陽ざしを受けて明るく浮き出してゐる。水を呑みながら握り飯を喫し山を降る。弟子屈より少し手前で道を右にとり硫黃山に向ふ。此の山はアイヌ語のアトサヌプリである。噴煙がゴウゴウと音を立てて悽絶極りない。その山麓一帶がこれはまた何と綺麗なことか、磯つゝじの純白の花が今を盛りと一面に地を這つてゐる。磯つゝじは別名麝香石楠花又は細葉つゝじともいふ。その花園を前に鬪牛士を見る樣な服裝の女寫眞師が一人客待ち顏に佇づんでゐた。花園につゞいて立派な白樺の林がある。美幌迄の道は遠い屈斜路湖の湖岸を過ぎて急ぎに急ぐ。湖の汀を掘れば湯の出るところもある。此の途中にはアイヌ部落もある。道は美幌峠へと昇りに昇る。路傍には身の丈程もある蕗が密生してゐる。

やがて美幌峠に達すれば見ゆる限りの笹山だ。此處釧路、日高の國境にたつて過ぎ來し方を回顧すれば、何と雄大なパノラマが展開してゐるではないか。眼下には周圍四十八粁の屈斜路湖がその湖づらを盆地一杯に擴げてゐる。その中島は密林を着て地肌が見えない。中島の右手より和琴半島が手を差し延べてゐる樣に突き出てゐる。周圍を包む原始林は實におちついた綠色を呈してゐる。水を注げば溶けて流れむばかりの風情だ。空はあくまで澄んでゐる。空を映じて湖面も亦美しく澄んでゐる。湖の眞向ふに見ゆるのは摩周岳、稍左なるは斜里岳、和琴半島付根の上空あたりにかゝるは阿寒連峯、之等の山々の遠影は眞下に展げた近影と相對して實に美事な調和を保つてゐる。美幌峠に停つて去りがてに見るこの風景は天下の絶景といつてよからう。足下にふまへた美幌峠の山々も亦よい。見ゆる限りは笹山なれども其の線の軟かさに至つてはたとへやうもない。北天の空は低く手を伸べれば屆きそうな感じがする。北海の夏風はこゝに至つて冷氣强く、青笹は白波をたてるやうに白んで見える。

北天は低し笹山に風ひかる

夏風や笹波たちてなほつゞく

俯瞰すれば夏の湖碧し波たてず

美幌峠は高し夏空垂れかゝり

美幌峠に別れを告げ降ること稍暫しにして美幌の平野に出る。開墾された畑の美事さ。水田もある。北海道のこんなはづれに此の立派な農地があらうとは誰が豫想し得やうぞ。

行手の空にあやしき黑雲が湧き上つてきた。稻光が遠くで堅に光つた。氣溫がぐつと下つて來た。子を負うた女房が私共の車を呼び止めて美幌驛前まで乘せてくれと賴む。私共も美幌驛へ出るのだ。雨は直ぐ來そうだ。同情して乘せてやつた。驛前で降ろしてやると車代を出したが斷つた。驛前旅館の女將だつた。休んでゆけといつてくれたが、恩を着せるやうな結果になるのをおそれて一軒おいて隣の旅館に入つた。昨日からの運轉手ともいよ／＼お別れだ。厚

く禮を述べ相當の謝禮をして歸つて頂いた。夕食の後汽車に乘る。愈旅は歸途についたのだ。寢臺券を賴んで置いたのが野付牛で手に入つた。夜行故寢臺にもぐり疲を休める。ぐつすり寢込んで旭川を通過したのを知らなかつた。岩見澤でO君と別れた。O君は札幌經由で歸ることになつた。殘りの者は室蘭經由だ。白老でアイヌ部落を視察した。

內地人との雜種が多く純血の種族は數へる程しか居ないそうだ。全道合して二千に滿たぬ程に減じて、しかも尙年々衰退の一途を辿つてゐる由、只道廳では人道上の見地から之等種族の生活上の保護方策をとつてゐることを附記して置く。

此の邊の汽車から樽前山がよく見える。噴煙が東の方に流れてゐた。

今夜は登別溫泉に泊ることにした。D・T旅館に投宿したが女中の事務的なのは感心せなかつたが、溫泉の規模の大きさと湯の種類の多いことには驚かされた。此の旅館だけで十一種類の湯があるさうだ。此の設備だけは誰もが一度は見ていゝ。が、然し夏場は外來者御斷りとある。漁業家が保養の爲借り切るさうだ。安月給取の齒の立つところでない。此處も男女混浴だ。

此處で義兄の死を知らしてくれたH君の電報を受取つたので豫定通り歸ることにした。

明くれば二十七日北海道最後の日だ。バスで登別驛へ出る。滿員バスから汽車に乘り替へてホツトした。

途中見た室蘭は素晴しい發展振りだが詳しくは書くべきではない。室蘭でS氏と別れた。洞爺湖に行くといふのだ。義兄の死が私にそれをゆるさない。

歸りは私一人だがA君が函館まで送つて下さるといふ。勝手知らぬ身にとつては實にありがたいことだ。人の情は身にしみる。旅に出ては一層深く感じられる。

室蘭から長萬部間海岸一帶は北海道で一番氣候のよいところださうだ。雪も少いといふ。成る程水田も立派だし、農家の造りも何處か內地に似てガツチリしてゐる。

森驛附近を通過する時アカシヤの花が盛りと咲いてゐる

のが見られた。第一日に此處を通る時何故氣附かなかつたのか不思議なことだ。アカシヤの並木の上には印象深い駒ケ岳がのぞいてゐる。

アカシヤの上にかゝれり駒ケ岳

歸心なほアカシヤの花を見つゝ過ぐ

函館着。連絡船の出港まで一時間半ある。急いで自動車をとばし市内を一巡する。大火の跡も大體復舊してゐる。五稜廓は榎本武揚を想起するところだが、私は小學校時代此の濠から氷を採取すると地理で學んだことを思ひ出した。今は水が汚れて取れないとのことである。配水池のある高臺に登ると市街は眼下に展望出來る。函館灣と大森濱とを表から裏に結んで出來た港街だ。

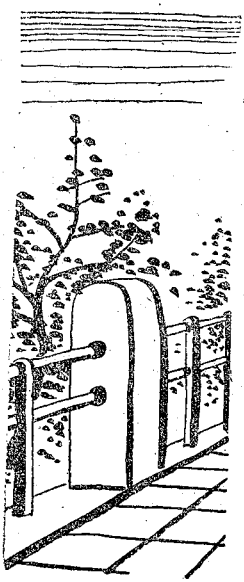
歸りには函館驛に鈴蘭賣の乙女を見かけなかつた。もう鈴蘭の季が過ぎたのかも知れない。

函館に鈴蘭賣れる乙女はも

東京より僅か十日間の行程ではほんの一部分しか視察出來ない。何しろ北海道は廣いのだ。機を見ても一度渡道しやうと深く心に期した。

A君は大雪山を案内するから必ずも一度來るやうにとしきりにすゝめる。連日の御世話に對しては謝しきれぬものがある。厚く禮を述べてA君と袂別して上船する。A君は阜頭にたつてなほ見送つて下さる。

やがて出港合圖の銅羅がなる。小雨がしとしとと港を煙らする。歸りもやはり寒さがきびしい。

船はしづかに阜頭を離れる。忘れ物をしたやうに私は暫し雨の甲板に停立した。私の視線は阜頭より大島半島の山の緑に注がれてゐるのである。

夏雨に島山遠くうすれつつ